様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０３２９７

研究課題名（和文）難民出身のモン(Hmong)と国家に関する人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological study on the relationship between Hmong refugees and the state

研究代表者
中川　理（Nakagawa, Osamu）

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・准教授

研究者番号：３０４０２９８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ラオスから難民としてフランスに移住した少数民族モンが、彼らが「モンらしい」と考える誰からも統治されない生き方を、南仏における農業実践を通して実現していることを、民族誌的調査を通して明らかにした。ただし、このような「独立の理想」を否定して階層化された集団を作ろうとする運動が繰り返し現れる点、「独立の理想」は女性と自然を資源として利用することで成立するという矛盾を含んでいる点に注意する必要がある。また、国家の管理の強化によって「独立の理想」が損なわれたとき、トランスローカルな親族関係を利用した再移住が試みられることも本研究は示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
自由と独立を志向するモンの動態を多面的な民族誌によって解明するとともに、より広い国家・主権・統治に関する理論的枠組みにこの民族誌を位置付けたことが、本研究の学術的成果である。本研究が成果として提示した「部分的アナキズム」や「平等主義とヒエラルキーの揺れ動き」といった概念は、国家の主権のあり方を現実に即してより精緻に考えることを可能にするものである。これらの概念は、そして本研究が明らかにしたモンの生き方は、現代社会における自律的な生き方について、新たな視点から構想する基盤となるといえる。

研究成果の概要（英文）：Through ethnographic research, this study revealed that the Hmong, an ethnic minority who migrated to France as refugees from Laos, have realized a way of life not governed by anyone that they consider “Hmong-like”, through their agricultural practices in the south of France. However, it is important to note that movements that criticize this “ideal of independence” and attempt to create a hierarchical structure repeatedly appear, and that the “ideal of independence” is only possible through the use of women and nature as resources. The study also showed that when the “ideal of independence” is undermined by increased state control, Hmong farmers attempt to re-migrate using translocal kin relationship, in search of new possibilities of autonomy.

研究分野：文化人類学

キーワード：グローバリゼーション　主権　難民　平等性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

モン（Hmong）は、中国および大陸部東南アジアに住む山岳少数民族である。ラオスに住んでいたモンの多くが、1975 年のラオス人民共和国成立後タイに難民として逃れた。その後、彼らはアメリカ（約 10 万人）やフランス（約 1 万人）などの国々に第三国定住した。フランスに来たモンは、全国の都市に分散しておもに工場の単純労働者となった。しかし、1980 年代後半から南部のニーム周辺地域へと再移住して農業に従事するようになった。おもにズッキーニを家族単位で生産し、他の農民と並んで青果市場で仲買業者を相手に生産物を販売している。

研究開始時において本研究は、以下の三つの学術的課題を背景として、フランスに住む難民出身のモンと国家の関係を民族誌的に把握することを目標として設定した。

（１）「国家なき社会」論の再生

J.スコット（スコット、ジェームズ・C 2013 『ゾミア：脱国家の世界史』、佐藤仁（監訳）、みすず書房）は、本研究が対象とするモンを含む東南アジアの山岳少数民族のアナキズムを、遅れた制度の残存ではなく国家から逃れるための意図的な選択の結果としてとらえなおした。既存の国家の統治から逃れようとする「国家をかわす特性」と、集団の内部から国家が生成しないようにする「国家を阻止する特性」によって、ヒエラルキー的な国家と正反対の平等主義的な「国家なき社会」としてこれらの社会は生成してきた、とスコットは考えた。平等性とヒエラルキー、アナーキーと国家に対する古くからの人類学的関心を再活性化するのに、この研究は大きく貢献した。だがスコットは、現在は地球上のすべてが「統治された空間」になりつつあるとし、自律的な領域は過去のものと考えている。しかし、果たしてそうだろうか。

（２）「主権」の人類学

現在のグローバル状況下での「主権」をテーマとする近年の多くの人類学的研究は、独占的な国家主権を想定してそれが「ある」か「ない」かを判断するのではなく、より細かな様相を記述するための概念道具を作り出している。「複合的、暫定的で、つねに異議申し立てされるものとしての主権」のような概念がそれに当たる(Hansen, Th. B. and F. Stepputat (eds.) 2005 *Sovereign Bodies*, Princeton U. P.)。これらの概念は、事実上の主権は必ずしも国家によって独占されておらず、様々な集団（コミュニティからギャング組織まで）によって地域的かつ部分的に非公式なやり方で保持されていて、それらが折り重なって対抗しあったり共存したりしているという状況があることを認識可能にしている。この理論的立場からは、スコットが過去のものと考えた自律的な領域は、国家主権の確かさが失われつつあるグローバル状況下において、より細やかな民族誌を通した再検討に値すると考えられる。このような研究は、周縁的な状況を民族誌的に把握するためだけでなく、今日における国家と人々の生との関係をより正確に概念化するために必要とされている。

（３）トランスナショナリズム研究

各国で周縁に位置する移民・難民は、多くの場合トランスナショナルなネットワークを形成している。近年の移民・難民研究は、このような「トランスナショナルな社会空間」の様相を解明しようとしてきた(Levitt, P. and S. Khagram (eds.) 2007 *The Transnational Studies Reader*, Routledge)。この問題意識は、「主権」の人類学と接合可能である。すなわち、自律的な領域がどのように複数の国や地域にまたがって存在しているのかを問うことが、一つの国家における中心-周辺というモデルを乗り越えるために必要になっている。

２．研究の目的

本研究は、ラオスから難民としてフランスに移住した少数民族であるモン（Hmong）が、どのように国家と交渉しながら自律的な領域を作っているのかを明らかにすることを目的とする。さらに、この領域のなかで社会関係の平等性を維持するメカニズムがどのように働いているか、この領域がどのようなトランスナショナル／トランスローカルな広がりを持っているかを検討する。このような民族誌的事例研究をとおして、グローバル状況下における国家・主権・統治の概念を問い直し、「部分的な」自律性のあり方を概念化する。また、難民出身者の生き方の現実的理解にもとづき、受け入れ国への完全な統合を前提としないオルタナティヴな共生モデルの可能性を探求する。その際、以下の三点に特に注目し、フィールドワークにもとづいて解明する。

（１）統治をかわす実践とその認識

モン農民は、自らの「主人」となれる仕事として農業を高く評価し、厳しい労働に励んできた。

その結果、今や彼らは地域におけるズッキーニ生産の中心となっている。ただし、彼らの農業には、親族や不法滞在移民労働者の無申告雇用をはじめとするインフォーマルな実践が含まれている。それに対して、国は近年取り締まりを強めている。頻繁に査察が行われ、多額の罰金を受ける農民が出ている。この状況において、国家とモンのあいだの交渉がどのように行われているか、そして、モンが国家の統治と自分たちの自由と独立をどのように想像しているかを、彼らの実践と語りから明らかにする。

（２）平等性とヒエラルキーの動態

南フランスのモン・コミュニティは十数個の父系クランに分かれていて、ライバル関係を通して、平等性を比較的保っている。卓越しようとするクランや個人に対しては「嫉妬」から引きずりおろそうとする勢力があらわれる。しかし、このような平等性を否定的にとらえて、リーダーを待望する人々もいる。その際、「モン王」や「モン国」の神話的イメージが用いられる例がある。農業におけるリーダーシップ、キリスト教への改宗、モンのアソシエーション活動、メシアニズム的運動といった現象は、いずれもこのような揺らぎに関わっていると、予備調査の結果から仮定できる。そこで、以上の諸現象について調査を行い、モン農民における平等性とヒエラルキーの動態について明らかにする。

（３）トランスナショナルな社会空間

フランスのモンはアメリカ、仏領ギアナ、タイ、ラオスのモンと密接な関係を保っている。結婚、送金、訪問、移住などが国や大陸をまたいで行われている。とりわけ、インフォーマルな農業実践に対する国の管理が強まっている現在、フランスから仏領ギアナへの移住を、統治から逃れる手段として計画・実行するモンが増えている。そこで、トランスナショナル（仏領ギアナの場合はトランスローカル）な結婚、送金、訪問の関係について、聞き取りを通して明らかにする。また、仏領ギアナにおいてフランスからの移住者の調査を行い、彼らの現地のモン・コミュニティへの統合プロセスを解明する。それによって、モンがトランスナショナル／ローカルな社会空間をどのように想像しているかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、研究期間中にフィールドワークと理論的検討の両面から研究課題に取り組み、最終的に両者を統合して全体の研究成果をまとめる。フィールドワークは、フランス・ニーム周辺地域およびフランス領ギアナにおいて実施する。調査トピックは、モンと国家の関係、コミュニティ内の平等性、モンのトランスナショナリズムである。二つのフィールドで得たデータを相互に関連づけることで、これらのトピックについて包括的に理解する。平行して、「主権」の人類学および「平等性とヒエラルキー」についての理論的検討を行い、論文としてまとめる。最後に、フィールドワークと理論的検討の成果を統合する。

４．研究成果

本研究全体を通して、「部分的アナキズム」と名付けることができる生活の一部の位相に関わる自律性を、モン農民が南フランスにおける農業実践を通して成り立たせていることを明らかにした。ただし、このような自律性が常に肯定的に捉えられるわけではないと明らかにした点も、本研究の成果である。みんなが命令されることを嫌うがゆえに争い合う状況を嘆き、その状態を脱して一つにまとまろうとする動きは繰り返しあらわれる（生産者団体、メシアニズムなど）。したがって、ヒエラルキーと平等性のあいだの揺れ動きとしてモン難民の社会をとらえることができる。本研究はまた、モン農民男性の自由と独立が、女性・労働者・自然を資源として利用することで成り立っていることを明確化した。ただし、これらの関係は一方的な支配と服従には収まらない相互的な利用の側面を持っている点も示した。さらに、自律性を維持するために、モンがトランスナショナルなネットワークを活用している点を、仏領ギアナへの移住の調査から明らかにした。これらの要素の相互的な結びつきを民族誌的に示したことが、本研究全体の成果である。個別的な研究成果のポイントについて、以下に４点に分けて示す。

（１）モンの農民化プロセスにおける性向と装置の出会いの解明

本研究の聞き取りからは、フランスにおけるモンの農民化が自由と独立への願望と関わっていることが明らかになった。工場での仕事をやめて南仏に移住して農民となったのは、工場で「奴隷」として働くことから逃れて自由に生きるためだと、彼らはみんな同じように説明する。つまり、上司の命令に従って時間通りに働く工場での労働は、モンにとって耐えられないものであったことが分かる。このような支配-従属関係に対する反発は、「モンらしさ」としての「独立の理想」と結びつけて語られる。ここから、彼らは「モンらしく」命令されずに生きるために農民となったことが理解できる。ここには、スコットが『ゾミア』において指摘した、統治から逃れて平等主義を目指すモンの性向との共通性を見いだすことができる。

調査から明らかになったのは、南仏に独特の農業のあり方が、このようなモンの性向とうまく合致したという点である。南仏の農民もまた、自由と独立の精神を守るべきものとして価値づけてきた。この点は、生産と取引の両面について指摘できるが、特に取引の局面は重要である。19世紀から現在まで続く、仲買業者と農民が対等に交渉を行う市場取引の制度は、この精神を具現化するものとして大事に守られてきた。したがって、自由を求めるモンの性向（ディスポジション）と、このような市場の装置（ディスポジティフ）が合致したからこそ、モンは南仏の農業に居場所を見いだすことができたと解釈できる。

以上の調査結果から、偶然的な出会いを通して、フランスのモン難民が自律性のニッチをかたちづくっていることを本研究は明らかにした。本研究ではアナ・チンの「偶然的」で「はかない」アッセンブリッジという概念を用いて、この状況を分析した。

（２）モン農民における平等主義とヒエラルキーの揺れ動きの解明

同時に本研究は、このような自由と独立へと向かう性向がモン自身によって否定的に解釈され、そのような性向がもたらす状況を乗り越えようとする運動を繰り返し生み出していることを明らかにした。彼らは、モンが（クランや個人など様々なレベルで）お互いに支配されることを嫌い、上に立とうとする者を引きずり降ろそうとする傾向をしばしば批判的に語る。対立しあって一つにまとまれず、コミュニティが弱体化・周縁化する結果になるからである。本研究の調査では、このような分断と対立を乗り越えて一つにまとまろうとする運動が、多様な形態を取ってあらわれることを突き止めた。

そのなかには、プロテスタントへの改宗や現代版メシアニズムの流行を数えることができる。プロテスタントとなったモンは、クランなどの対立を超越した、神の下での人々の団結を強調している。また、現代版のメシアニズムは、あるリーダーの導きで「モンの国」が到来すると主張する。これらの統一の試みは失敗するが、また別のかたちで新たな試みが繰り返しあらわれる。本研究では、モン農民による「生産者団体」結成の事例に関する調査を行い、この問題について検討した。この事例において、モン農民がばらばらにズッキーニを生産・販売している状況を克服して一つの「生産者団体」を作ろうとする活動が、モンの歴史的分断・対立の乗り越えとしてとらえられていることを示した。

これらの事例から、フランスのモンは一方的に平等主義へと向かっているのではなく、平等主義とヒエラルキーのあいだで揺れ動いていると明らかにしたことが、本研究の成果である。このような観点は、一方向的に平等主義を志向する存在としてモンをとらえる先行研究の視点を相対化するものである。また、より一般的に、平等主義とヒエラルキーの動態について新しい理論的視座を提供するものである。

（３）モン農民の女性と自然への依存の解明

以上で明らかにしたモン農民の自由と独立は、じっさいは男性に限定されている。本研究では、モン男性の自由が何によって支えられているかを、女性と自然の二点に注目して解明した。

モン男性が農民として自由を享受するためには、妻の働きが不可欠である。夫が市場で取引を行っている時、妻は畑で収穫を行わなければモンの農業は成り立たない。ところが、通常はそのことは不可視化されている。病気や離婚で妻が不在になったときにはじめて、妻の存在が農民としての独立を可能にしていることが明らかになる。本研究では、妻を失ったモン男性がホームランド（ラオスやタイ）に新しい妻を探しに行く実践に関する調査を通して、この問題について検討を行った。そこからは、モン男性が農民としての独立を維持するために、新しい妻を必要としていることが明らかになる。しかし同時に、妻探しは実利的な目的だけで行われるわけではないこと、また、女性の側もフランスのモン男性を利用しようとする主体性を持っていることも示した。

自然との関係については、モン農民がズッキーニを資源として利用することで自らの自由と独立を実現していることを示した。モンが行っている農業は、品種改良された種子を農薬や化学肥料と組み合わせて生産を最適化する近代的な農業である。この点で、女性のケースと同様に、生き物としての植物の力にモン農民は依存しているが、その関係は不可視化されているといえる。しかし調査からは、モン農民が一方的にズッキーニを利用しているだけではなく、モン農民がズッキーニをケアする関係も存在していることが分かる。

これらの調査結果から、モン農民の自由は女性や自然の見えない働きに依存しているが、その関係は一方的な搾取に還元できない複雑性を持つことを本研究は示した。この論点は、自由と依存の関係に関する今日の議論に貢献するものである。

（４）モンの「部分的アナキズム」と移住プロセスの解明

本研究はまた、フランス国家との相互行為を通して、モン農民が統治されない生き方を想像していることを明らかにした。もちろん現代のフランスにおいて国家の統治を受けずに生きることは不可能であり、多くの面においてモンは法に従うよき市民として生活をしている。しかし、労働の組織化においては、部分的に統治を逃れようとしていることが調査から分かる。モン農民は、多くの場合オーバーステイのタイ人やモンを農業労働者として雇用している。このような実践は長年にわたって不問に付されてきたが、近年になってより頻繁に警察による査察が行われるようになっている。モン農民は、「モンらしい」自由な生き方を妨げるものとして、批判的に

国家による介入を語っている。ここにあらわれているのは、国家による統治の外部にある存在として自分たちをとらえる想像力である。本研究では、このような想像力を「部分的アナキズム」と名付けた。

国家による管理の厳格化に対して、南仏のモン農民の一部は自由を求めて新しい場所へとふたたび移動しようとしている。本研究では仏領ギアナでの調査によって、以前から同地に住む親族への一時的依存を通して移住が行われていることを明らかにした。密接でなくとも親族関係を喚起することによって、新移住者は先住者からの保護を受けることが可能になる。しかしその関係は一時的であり、農民として生計を立てられるようになると新移住者は独立する。逆説的であるが、親族への依存のおかげでモンの「独立の理想」は達成されているといえる。ここから、トランスナショナル・トランスローカルな関係性を利用することで、モンは移動しながら「部分的アナキズム」を再生産していることを本研究は明らかにした。

以上に示したように本研究は、詳細な民族誌的記述によって、自由を志向するモンの動態を多面的に解明した。それと同時に、「平等主義とヒエラルキーの揺れ動き」や「部分的アナキズム」といった概念を通して、国家と自律性の関係を理論的に示すことに成功した。また、本研究課題を通して、国家との政治的関係だけでなく、企業との経済的関係を組み込んだ理論的枠組が必要であることが見えてきた。今後、本研究の成果をより発展させるには、拡張した理論的枠組のもとで調査を継続し、モンの自律性に関してより包括的な理解を進めることが重要な課題となる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 中川理	４．巻 87(3)
２．論文標題 書評：西井涼子・箭内匡編『アフェクトゥス：生の外側に触れる』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『文化人類学』	６．最初と最後の頁 516-518
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.87.3_516	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中川理	４．巻 2022年5月号
２．論文標題 仏領ギアナで「大きさの感覚の違い」を知る	５．発行年 2022年
３．雑誌名 月刊みんぱく	６．最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中川理	４．巻 7
２．論文標題 『接合』から資本主義を考える	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『民博通信Online』	６．最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中川理	４．巻 179
２．論文標題 「自分自身のパトロンになる：フランスのモン農民の生き方」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『季刊民族学』	６．最初と最後の頁 14-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川理	4．巻 3467
2．論文標題 D.グレーバー著『民主主義の非西洋起源について』（以文社）を読む	5．発行年 2020年
3．雑誌名 図書新聞	6．最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川理	4．巻 13
2．論文標題 あらぬ方向：業績紹介に代えて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 くにたち人類学研究	6．最初と最後の頁 3-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中川理	4．巻 84(3)
2．論文標題 左地亮子著『現代フランスを生きるジプシー：旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 355-358
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.84.3_355	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川理	4．巻 3月5,12,19,26日
2．論文標題 仏領ギアナの人々 ①カイエンヌの市場、②モンの集落、③宇宙マラソン、④新しい隣人	5．発行年 2022年
3．雑誌名 毎日新聞	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川理	4．巻 3595
2．論文標題 書評：宮崎広和著『金融人類学への誘い』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 図書新聞	6．最初と最後の頁 3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中川理	4．巻 88(3)
2．論文標題 書評：デヴィッド・グレーバー著『価値論：人類学からの総合的視座の探求』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 594-596
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.88.3_594	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中川理
2．発表標題 「フランスのモン難民から考えるグローバル化」
3．学会等名 第522回 みんぱくゼミナール（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Osamu Nakagawa
2．発表標題 Freedom and dependence among Hmong refugee families in France
3．学会等名 国立民族学博物館特別研究「不確実性の時代における家族の潜勢力：モビリティ、テクノロジー、身体」グループ4・ウェブ・ミーティング
4．発表年 2022年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 「グローバル資本主義における多様な論理の接合」
３．学会等名 民博共同研究会「グローバル資本主義における多様な論理の接合：学際的アプローチ」
４．発表年 2022年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 「フランスのモン農民と考える『自由』」
３．学会等名 第532回国立民族学博物館友の会講演会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Osamu Nakagawa
２．発表標題 Freedom and dependence among Hmong refugee families in France
３．学会等名 International Symposium ‘Family Potential in Uncertain Times’
４．発表年 2023年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 「周縁の生産性：フランスのモン難民が市場と出会うとき」
３．学会等名 民博共同研究会「不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う―モノ・制度・身体のからみあい」
４．発表年 2021年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 「トランスナショナルな移動と集合性の生産：モン難民／フランス農民の事例から」
３．学会等名 第308回民博研究懇談会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 「自由を可能にするもの：忘却・コミュニズム・重層性」
３．学会等名 民博共同研究会「不確実性のなかでオルタナティヴなコミュニティを問う―モノ・制度・身体のからみあい」
４．発表年 2022年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 エスノリベラリズムとその矛盾：フランスのモン農民の経験から
３．学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 部分的アナキズム：フランスのモンの事例から
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 エスノリベラリズム・リベラリズム・ネオリベラリズム
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究会「ネオリベラリズムのモラリティ」
４．発表年 2019年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 「可能なもの」と「可能にするもの」の人類学
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究会「人類学を自然化する」
４．発表年 2020年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 「植え替えられた」平等主義：フランスのモン農民における社会イメージ
３．学会等名 第52回日本文化人類学会研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 フランスのモン農民における負債と自由
３．学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究」、科研費基盤（B)「 負債の動態をめぐる比較民族誌的研究：アジア・アフリカ・オセアニア農村社会を中心に」
４．発表年 2021年

１．発表者名 中川理
２．発表標題 植物のコントロールとケア：モン農民によるズッキーニ生産の事例
３．学会等名 第58回日本文化人類学会研究大会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計15件

１．著者名 松村圭一郎・コクヨ野外学習センター（編）、中川理（分担執筆）	４．発行年 2021年
２．出版社 黒鳥社	５．総ページ数 301
３．書名 『働くことの人類学：仕事と自由をめぐる8つの対話』（中川理「働くこと・生きること」(239-270)）	

１．著者名 藤井真一・川口博子・村橋勲（編）、中川理（分担執筆）	４．発行年 2022年
２．出版社 能登印刷出版部	５．総ページ数 515
３．書名 『サバンナの彼方―栗本英世教授退職記念文集』（中川理「ゆるやかな影響」(248-250)）	

１．著者名 栗本英世、村橋勲、伊東未来、中川理（編著）	４．発行年 2022年
２．出版社 大阪大学出版会	５．総ページ数 309
３．書名 『かかわりあいの人類学』（中川理「違う存在になろうとすること：フランスのモン農民とのかかわりあいから」(265-283)、「不確かな世界で生きること」(285-295)）	

1．著者名 ジョン・スコット（編著）、白石真生、栃澤健史、内海博文（監訳）、中川理（訳）	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 376
3．書名 『キーコンセプト社会学』（ルッツァ、カルロ（著）、中川理（訳）「社会運動」(185-187)、スコット、ジョン（著）、中川理（訳）「制度」(235-238)、ファルチャー、ジェームズ（著）、中川理（訳） 「世界システム」(244-249)）	

1．著者名 アルジュン・アパドゥライ（著）、中川理、中空萌（訳）、中川理（解説）	4．発行年 2020年
2．出版社 以文社	5．総ページ数 296
3．書名 『不確実性の人類学：デリバティブ金融時代の言語の失敗』（中川理「不確実性の人類学のために」(261-281)）	

1．著者名 春日直樹、竹沢尚一郎（編著）、中川理（分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 308
3．書名 『文化人類学のエッセンス：世界をみる／変える』（中川理 「自由」(179-198)）	

1．著者名 松村圭一郎、中川理、石井美保（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 世界思想社	5．総ページ数 224
3．書名 『文化人類学の思考法』（松村圭一郎・中川理・石井美保「世界を考える道具をつくろう」(1-13)）	

1．著者名 松村圭一郎、中川理、石井美保（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 世界思想社	5．総ページ数 224
3．書名 『文化人類学の思考法』（中川理「国家とグローバリゼーション：国家のない社会を想像する」(111-123)）	

1．著者名 中川理（他）	4．発行年 2019年
2．出版社 青土社	5．総ページ数 246
3．書名 『現代思想』47(6) 5月臨時増刊号「現代思想43のキーワード」（中川理「アナキズムと人類学」(128-133)）	

1．著者名 石井正子、中川理、マーク・カプリオ、奥野克巳（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 290
3．書名 『移動する人々：多様性から考える』（中川理「移動のイメージを豊かにするために」(1-17)）	

1．著者名 石井正子、中川理、マーク・カプリオ、奥野克巳（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 290
3．書名 『移動する人々：多様性から考える』（中川理「移民と国民の連続性：フランスのモン(Hmong)の事例から」(129-156)）	

1．著者名 奥野克己・石倉敏明（編）、中川理（執筆分担）	4．発行年 2018年
2．出版社 以文社	5．総ページ数 224
3．書名 Lexicon 現代人類学（中川理「価値と倫理」(124-127)「主権」(138-141)）	

1．著者名 岸上伸啓（編）、中川理（執筆分担）	4．発行年 2018年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 336
3．書名 『はじめて学ぶ文化人類学：人物・古典・名著からの誘い』（中川理「アルジュン・アパドゥライ」(257-263)）	

1．著者名 大村敬一・中空萌（編）、中川理（執筆分担）	4．発行年 2024年
2．出版社 放送大学教育振興会	5．総ページ数 300
3．書名 『フィールドワークと民族誌』（中川理「生成する世界のフィールドワーク」(161-178)、「資本主義の民族誌」(179-197)）	

1．著者名 大村敬一（編）、中川理（執筆分担）	4．発行年 2023年
2．出版社 以文社	5．総ページ数 464
3．書名 『「人新世」時代の文化人類学の挑戦：よみがえる対話の力』（中川理 「グローバル・エコノミーの隙間からの挑戦」(197-224)）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関